週報
こひつじ
第39巻　27号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師　米村　英二

強制によらず

その三　自発性を重んじるパウロ

パウロもまた、強制をきらい、自発性を重んじる人だった。彼の書いたピレモンへの手紙を読めば、それがよくわかる。

手紙の背景はこうである。

ローマの獄中で、パウロはオネシモという若者を信仰に導く。彼は、ピレモンの家で窃盗を働き、逃亡してきた奴隷であったが、やがてパウロの訓育によって有能な若者に成長する。

だが、パウロは思う。

彼を自分のもとに置いたままでよいだろうか。彼の所有者であるピレモンに送り返すべきなのではないだろうかと。

それはオネシモにとっては恐ろしいことだった。当時、逃亡奴隷の罪はきわめて重かったからである。

ただ、幸いだったのは、ピレモンがパウロによって信仰に導かれた人であったことだ。

そこでパウロは、オネシモを寛大に扱ってほしいという嘆願の手紙を書き、彼にそれを持たせることにする。

ピレモンはパウロの弟子であったし、彼がそれだけの人物になれたのもパウロのおかげだった。ピレモン自身がだれよりもそのことをよく承知している。

だからパウロは彼に嘆願するのではなく、命令することもできたはずだ。しかしそれはやらない。

なぜやらないか。その理由を、彼はこう記す。

「あなたがしてくれる親切は強制されてではなく、自発的でなければいけないからです」と。

そしてその手紙を、

「私はあなたの従順を確信して、あなたにこの手紙を書きました。私の言う以上のことをしてくださるあなたであると、知っているからです」

と結んでいるのである。

このようにパウロは、どんな場合も、だれかに、何かをむりやりに、強制的にやらせることはしなかった。たとえ相手が自分の弟子であっても、である。彼は常に相手の意志を尊重したのである。

では、この手紙をもらったピレモンの反応はどうだったか。

私は想像する。彼はパウロの言う以上のことをして、オネシモをゆるし、軟禁されているパウロのもとにオネシモを送り返したに違いないと。

こうして快く、ゆるされたオネシモは、それから五〇年がたったとき、エペソの教会の監督になっていたと、ある歴史の書は記している。

ピレモンが、心から、喜んで、進んでやった行為は、オネシモという人物を作る大きなきっかけとなったのである。

同様に、私たちが何かを頼まれたとき、いやいやながらではなく、快く、進んで、そしてそれ以上のことをするなら、それは、私たちの思いを越えた大きな働きにつながることだろう。

私たちもピレモンのように、

「私の言う以上のことをしてくれるあなた」

と人にも、そしてイエス様にも言われるような存在になりたいものだと思う。

（終）

****

今日の礼拝

****

○第一礼拝は午前一〇時から、第二礼拝は午前一一時から。

○教会学校は午前一〇時からこひつじ館で。

○説教は米村牧師。

先週の礼拝

○司会は西岡潤也さん、奏楽は西岡なおみさん。

○説教は、宮元隆博さん。ヘブル書一二の七～一一。

宮元さんは五月にお父様を亡くされました。七〇歳でした。ずっと東京警視庁に勤める警察官でしたから、きびしいお父様でした。若い頃は確執もありました。しかし、やがてお父様は息子の隆博さんを認めてくれるようになりました。

「人によっては親子の関係を修復するのは難しいかもしれません。ただ一方で、最後の時を迎えてしまったら、この世では、どんなに高いチケットを買ったとしても会うことができません。よい関係を築いて最後を迎えることは残された家族にとっても心の支えとなるのではないでしょうか」

と宮元さんは語ってくださいました。

○証は猿渡陽子さん。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか」（ローマ七の二四）

の問いに、主がどのように答えてくださったかを実に正直に自分の体験を交えながら語ってくださいました。今も戦いはあるけれど、お母さんや長女の結実さんから、

「自分で抱え込まないで、何事も神さまにお任せすればいいのよ」

と励まされながら、日々を歩んでいるとのことでした。

○第二礼拝で、村上宗次郎・恵夫妻の長女佑月ちゃんの献児式を行ないました。

先週の出席

第一礼拝が四三名、第二が四二名、合計八五名（男二八、女五七）。子ども一一名。合わせて九六名。

CSキャンプ案内

○日時は七月二九日（土）～三〇日（日）。場所は下益城郡美里町ガーデンプレイス。CSの子どもと教師、それに保護者が対象ですが、手伝ってくださる方があれば感謝だそうです。

○七月二日（日）CSキャンプのためのバザーをやりました。収益金は約六万円。ご協力、感謝です。今日も玄関前で行ないます。

牧師身辺

六月二七日（火）に熊本を出て、東京駅で幸子さんと落ち合い、そこから姉が入所しているケアハウスのある千葉の鎌取に向かいました。案内役の、姉の長女恵美さんが、乗るべき電車の時間まで指定してくれたので、時間通りに目的地に着き、姉とも十分な時間を過ごせました。

やはり姉の認知症は進んでいました。

「私、妹の幸子よ、わかる？」

と幸子さんは何度も試みましたが、返ってくるのは、

「妹は幸子ですけれど、あなた、よく似てらっしゃいますわね」

という言葉ばかりで、やや残念そうでした。姉の記憶にあるのは、もっと若い時の幸子さんなのだと思います。

最後まで記憶はあいまいのままでしたが、ぼくたちが遠くから面会に来たのだということだけはわかってくださって、楽しく話せたのは慰めでした。

お世話をしている恵美さんと帰りの喫茶店でお茶を飲みながら、久しぶりの会話ができたことも懐かしく、また楽しいひとときでした。

コロナ禍で姉とは四年も会えずにいましたから、会話ができるうちに、また訪ねたいと幸子さんは思ったようです。

帰りは六月三〇日（金）午後の便でした。熊本の天候が悪く、着陸できない場合は羽田へ引き返すという条件つきの飛行機で、途中、かなり揺れたものの、なんとかぶじ帰ってくることができました。